

## 地域連携企画を振り返って

著者	石本 倫子, 影山 陽子, 内田 吉哉
雑誌名	NOCHS Occasional paper
巻	9
ページ	52-55
発行年	2009-06-30
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10112/2992">http://hdl.handle.net/10112/2992</a>

## 地域連携企画を振り返って

### 留学生の映した文化遺産

石本 倫子

留学生たちは、予想した以上に遠足や写真コンテストを楽しんでくれた。なによりも、平野で過ごした一日が、彼らのアルバムの1ページになったことがうれしい。そして写真の一枚一枚を眺めていると、彼らの想いの一端に触れるとともに、私たちが失いかけているものに気付かされる。

それは「歴史」や「文化」に対する屈託のない感性である。たとえば雨樋をアップにした写真(写真1)。たしかに先入観がなければ、いったいどんな装置なの



写真を撮る留学生

かと興味をそそられるだろう。私たちには馴染み深い神社の手水所もあらためて見ると、柄杓が整然と竹の上に置かれた様子は、「奉納」の文字まで清廉に感じられる(写真2)。

そして彼らの眼差しの可動域は広い。縁の下の所在ない空間に惹きつけられたかと思えば(写真3)、鳥居と、そこから電線までの空を見上げている(写真4)。ときには空間よりももっと曖昧な、軒下に漂っている空気こそが被写体かと思わせるものもあって(写真5)、まさに縦横無尽だ。

また、境内の樹木や茂みなど、緑の写真が目を惹く(写真6)。「鎮守の森」という言葉を知らずして、聖域の本質を見抜いているように思う。そして、その鋭い感覚は、私たちが郷愁を覚える風景を的確に切り取っている。はたして、これが「歴史的景観」と言われるものではないだろうか。

それはありふれた玄関先であったりもする。考えてみれば、植木鉢の置きかた一つとっても彼らの家庭や故郷とは違うしつらえで、おそらく表札や郵便受けにも無心ではなかったのだと思う(写真7)。そして、私たちが通り過ぎ、忘れ去ってしまうような名もない四ツ辻の静止画には、胸を衝かれる思いさえする(写真8)。



写真1 (撮影：金 東)



写真2 (撮影：セシル・ブルー)

すべての写真を挙げて紹介できないのは残念だが、彼らのファインダー越しに教えてもらったことがある。もっとのびやかに、素直に感じる場所から「文化遺産」を探究すること。そこから始まる研鑽の道は厳しくありたいが、スタート地点への行き方は自由。そういう公正なる寛容さが、私たちにもっとあっていいと思う。



写真3 (撮影: トリンカ・クロフォード)



写真4 (撮影: 張 怡)



写真5 (撮影: ジェシカ・ホートン)



写真6 (撮影: ローランド・ユウタ・ヘンドリクソン)



写真7 (撮影: 周 嬌妮)



写真8 (撮影: 韓 一瑾)

## 平野の町との関わり

影山 陽子

当センターと平野との関わりは、2006年11月25日に開催した、第3回 NOCHS 文化遺産学フォーラム「まちづくりと文化遺産」に遡る。このフォーラムでは、地域で町づくりに携わっているいくつかの団体の方にお話していただいたが、平野からは「平野の町づくりを考える会（以下、会）」事務局である川口良仁氏にお話いただいたのだ。その次に平野と関わったのは、2007年10月28日開催の地域連携企画第3弾「もめん博物館 in 平野」であった。このときには会の月例会議にお邪魔して、企画案から相談させていただいた。開催場所や当日使用する道具などについて助言をいただいた上、開催場所は全興寺境内をお借りすることが出来た。

会の月例会議は、参加者が自由に企画を持ち寄って、他の参加者から意見を募る方式である。会のメンバーでなくとも、平野で何か企画をしたい人間は誰でも参加できる。「もめん博物館 in 平野」を開催したときだけでなく、その後『オケージョナルペーパー No.6』の作成のため現地調査をしたときなどにも参加させていただいた。いずれのときにも、平野の人情味があふれ、和気あいあいとした、年齢性別関係なく忌憚のない意見が聞ける会であった。

今回の地域連携企画第4弾「平野をさぐる」のために2008年9月下旬に参加した会議では、こちらの説明に対して、企画をもう少し一般向けにしたほうがよいことや、広報の方法などについてご助言いただいた。また平野には古い町並みを見るために外国人もたびたび訪れるらしく、「大阪を探検しよう！」で外国人留学生が町をめぐることについても、すんなり受け入れてもらえた。それだけでなく、「探検しよう！」当日は「平野・町ぐるみ博物館」開催日でなかったにもかかわらず、博物館を開けてくださった方もいた。「平野をさぐる」当日も会のメンバーを何人もお見かけし、改めて平野という町のあたたかさを実感することが出来た。



平野映像資料館の館長さんを囲んで



かたなの博物館にて

## 人びとの繋がりと文化遺産

内田 吉哉

平野という町は、大阪市内に位置しながら、近世に大坂三郷と称された地域とは異なる文化遺産を形成している。それは、かつてこの地域が平野郷と呼ばれる自治都市であったことに由来する。現在でも平野の地域住民の方がたには、「平野気質」とでもいうべき独特の気質があるように感じられる。

そのためか、平野では私たちが地域連携企画でお世話になるより随分前から、町づくりの運動が活発であった。「平野の町づくりを考える会」の活動は、形式ばった堅苦しさとは無縁の雰囲気で開催されている。その中で私たちが仮に「学術研究」という大上段に振りかぶったスタンスで行事を開催した場合、ともすれば空振りに終わる恐れがあった。

結果として第4回地域連携企画「平野をさぐる」は、地域の多くの方がたに参加していただき、成功を収めたといえよう。その成功には、2つの要因がある。

1つには、「平野の町づくりを考える会」のご協力がある。これまで「平野の町づくりを考える会」には、2006年11月に開催された第3回文化遺産学フォーラム「まちづくりと文化遺産」、2007年10月に行なわれた地域連携企画第3弾「もめん博物館 in 平野」でお世話になった。また『Occasional Paper No.6 もめん博物館 in 平野』を作成する際には、「平野町ぐるみ博物館」の調査もさせていただいた。こうした活動を通じて、今までも平野では当センターと地域住民の方がたとの間に連携がとられてきたのである。今回の企画においても、準備を進める中で「平野の町づくりを考える会」に相談をさせていただくことがあった。堅苦しさ避けるために、私たちが立案した企画についてアドバイスをいただき、他にもポスター・チラシの配布など広報活動の面で便宜を図っていただいた。

もう1つには、会場を使用させていただいた杭全神社が、地域と密接な繋がりを持つ神社であったことが挙げられよう。当センターの研究活動は、寺社に遺された文化遺産の調査を主軸のひとつとしている。その理由は、寺社が歴史的に文化遺産を多く集積してきた場であると考えためである。

寺社における文化遺産の集積は、同時に寺社と地域住民の繋がりくまたの緊密さを意味すると考えられる。杭全神社はまさにその典型である。一例として、毎年7月に行なわれる平野郷の夏祭りくまたで、各町の地車が杭全神社に宮入りし一堂に会する光景が挙げられる。平野の重要な文化遺産である夏祭りにおいて、最大のスペクタクルである地車が、杭全神社の境内に集まってクライマックスを迎えることは、文化遺産と地域住民との関係を極めて象徴的に表わしている。同様に、地域連携企画第4弾「平野をさぐる」でも、当初の心配をよそに多くの参加者に集まっていたことは、杭全神社に平野の文化遺産が集積されていることを裏付けるものであったといえよう。



杭全神社参道